熊本・徳永直の会会報

第 38 号

「鳥が渡る」 1979. 宮崎静夫

徳永直生誕百年特集

1999年1月

目次

やっぱり・直・大好き……池田　義一　2
白いぶよぶよした奇怪なもの……岩本　税　3
徳永直と湯浅克衛……浦田　義和　4
平成浮浪者事情……植村　勝明　6
掌……大橋三千代　7
孟宗忌雑感……熊懐　友春　8
もし徳永直が今生きていたら……木庭　克敏　9
芽木太る……坂本美津子　10
江津湖の花火……沢田　博行　11
徳永直の「八月十五日の日記」……千葉　昌秋　11
恩沢しろき……柘植　周子　13
青史さん、ご苦労さまでした
―ますますのご活躍を……徳永　光一　13
世相雑感……中田　幸作　14
徳永直の思い出……藤本　憲信　16
徳永直年譜……津田　孝　編　19
事務局だより……28

徳永直生誕百年祭

趣意書

熊本が生んだ世界的作家徳永直の生誕百年祭を催すことは、郷土の誇りであり、やらねばならない義務でもある。徳永直は、極貧の中に生まれ育った。いじめも受けた。差別も受けた。しかしそれらに耐え、それらを撥ね返して、雄々しく立ち上る。幼時からの労働の明け暮れが、彼を強くする。旺盛な勉学意欲が、彼を強くする。やがて人間の世の不平等に気付いた彼は、熊本における労働運動の草分け的存在となり、プロレタリア的短歌で仲間作りもする。そんな彼を、ふるさとは追放した。しかし、彼の不屈の労働者魂は、東京で花開く。世紀の大争議共同印刷ストライキを指導する。首切られた彼は、「太陽のない街」を引っさげて、日本の昭和文壇に躍り出た。堰を切ったような作家活動が始まる。日本プロレタリア文学では、小林多喜二と並ぶ大作家となり、社会主義のほとんどの国で翻訳される。戦後も、いち早く新日本文学会の設立に関与し、戦後日本文学の牽引者の一人として活躍した。しかも彼は、郷土熊本を描いた多くの作品を残していることでも人後に落ちない。

このような徳永直の生誕百年にあたり、熊本県民一丸となって彼の顕彰をすることは、今後の熊本地方文化の発展にも大いに寄与するものと考えられる。ここに徳永直生誕百年祭を催す意義があるのである。

一九九九年一月

熊本・徳永直の会

「やっぱり・直・大好き」

池田　義一

私は徳永直が大好きです。とにかく……。

映画を勉強し、これを生涯の仕事と決意して映画専攻学科・監督コースに学んだ私は、テレビ局の創生期に福岡の民放局を受験し、ディレクターとして働らき始めました。

教えてくれる先輩とて少なく、また技術的、経験的な修練にも乏しかったので、むしろ四年間の学生生活と映画撮影所でのバイトで修得した自分なりの体験の方が遥かに有効だったりして、仕事は大変面白いものでした。

そのころ、職場の仲間の誘いで福岡に根付いた伝統と歴史の在る演劇集団、「劇団・生活舞台」の活動歴と作風に共鳴して入団しました。

・「生活に根差した、嘘のない、人々の暮しと労働に豊かさと明るさを……そのための演劇を！」という座標軸をめざして、一心に脚本を書き、演出に専念しました。

一方、生活の基盤である放送産業は、まだこの世に生まれて幼なく、労働環境や労働条件の整備などには至って程遠く、まったく前近代的な押し付けの状況でした。やはりどうしても労資対等の条件を整えるためには労働組合の結成が不可決だという結論にいたり、当時九大法学部大学院生であったM氏に労働三法の教えを乞いながら、遂に労働組合を発足させ、どんな役回りか初代執行委員長に祭り挙げられてしまったのです。

若冠二十六才の、まさに人生の転機でした。M氏による週二回の全組合員による学習会は二年間続けられ、まさに目からウロコが落ちていくような、緊迫したストライキの中にも確信に満ちた人間の誇り、働らくものの不滅と変革への可能性を日々見出すことができる感動の毎日でした。

そのころ私は、同じく熊本の民放局で働らいていた現在の妻君と熱烈な恋愛をしていたのですが、これも創造意欲を誘発させてくれました。折から、生活舞台では、私も加った共同演出で、徳永直・「他人の中」の福岡での再演が大変好評だったことから、余勢をかって、「熊本で公演しよう」ということになったのです。頼りは熊本労演と彼女も所属する民放局の労働組合有志でした。

古い県立図書館での公演でしたが、確かな手応えと賞讃を得た興奮と感激を鮮やかに思い出します。

封建制度の中での徒弟制、米の生産と流通の過程での搾取、人間と恋心、階級社会と人身売買、ロードの意味、学問と生き方の大切さ、自然の目覚めと不正義への怒り……

「他人の中」は実に多様なテーマで描かれている素晴らしい作品ですが、何と私はその熊本公演の折、役者不都合により「女衒の役」（一切セリフはないが、演技力が要求され、私は当の役者にダメばかり出していた）を演じるハメとなり、空前絶後の初舞台を踏んだのでした。

時代は移り、熊本で映像製作のプロダクションを興すことになった私は、折から赤旗ニュースの依頼で、徳永直碑の建立と除幕式の様子を16ミリフィルムで収録しました。全国に徳永直が改めてメジャーなプロレタリア作家として再認識される地歩構築の一端の役割を果たせたことも思い出の一つです。

いま私は、業界の熱い想いに熊本朗読研究会の活動があります。中村

青史先生はじめ、詩人、研究家、アナウンサー、パーソナリティー、詩と朗読の愛好家で運営する会ですが、先日の研究発表会では徳永直作品を特集したところです。私は「最後の記憶」を読ませていただきました。これも大好きな、小品といえども直の幼少期の魂が満載された素晴しい作品です。兄チャンの直が、馬のアカをせき立てて、雨にぬれる釘坂の夜道を越えようとする必死の様は、まさしく直が生涯を通じて描きたかったテーマの原型……つまり「ロードの意味するはげしさとよろこび」だったのだと、涙なくしてはとても読み終れない感動を味合った次第でした。

徳永は、その素直さと優しさと、何時も困苦に打ちのめされない不屈な楽天性を余すところなく描き尽くした稀有な近代の作家として、やっぱり私は大好きだし、とても尊敬する日本の、熊本の作家なのです。

白いぶよぶよした奇怪なもの

岩本　税

一九九八年のことしは、徳永直没後四〇年を記念した。来年は、一八九九年一月二〇日生まれだから生誕一〇〇年になる。私の母が去る十二月二日に大往生した。一九〇三年十二月十一日生まれだったから満九六歳には九日及ばなかった。徳永直より四年後に生まれていたことになる。

私は文学を専攻していない。したがって文学論を書くつもりはない。単なる感想である。徳永の作品といっても、『徳永直短編選集』（徳永直文学碑をつくる会発行・一九七六年十一月一日刊）所収の七編ぐらいしか読んでいない。その他は、久保田義夫氏の『徳永直論』（五月書房・昭和五十二年五月刊）や、文学雑誌で一九九八年三月号『民主文学』の特集「一九九八年没後四十年」などを読んだぐらいである。

右の短編集の作品で、何となくひっかかるものがあった。『黒い輪』という作品である。この作品は、終りに、＜大正七年、一九一八年・小川五平が十九歳のときのことであった。＞と記してある。しかしこの作品が発刊されたのは、死の前年の昭和三十二年（一九五七年）四月となっているので、直が五十八歳のことである。

久保田義夫氏もこの作品には目をつけておられ、『徳永直論』ではわざわざ、第九章白いぶよぶよした奇怪なもの、と一章を設けて論じておられる。久保田氏は、このことばに関して、＜……一読して性的なものを感じさせる。しかも陳腐な感じの表現であるが、それでもプロレタリア作家という立場からすれば、特異なものにかかずらっているということになるだろう。……＞と指摘されている。

原文をみると、主人公小川五平たちが、阿蘇郡立野の勤務地である発電所から、赤水の秋祭りに行っての帰り道のこと、宿舎の台所女キンと二人だけになった折りのこと。

＜キンはさきにたって暗らい杉林の中にはいると、五平にしきりと身体をおしつけていたが、低い声でいった。

「あたし、おしっこするから見張ってて……。」

そっちをふりかえったとたん、五平は圧倒されてしまった。むこうむきに高々と裾をからげ肩の上にねじむけた顔をのせてじっとこっちをみているキンの眼が、逆に五平を突きとばしてしまった。大きな白いぶよぶよした奇怪なもの、それは五平の想像を絶したものだった。……＞

久保田氏は、キンのセックスへの誘いに応じられなかった五平＝直とみて、あれを踏みこえなければならなかった。あそこを踏みこえていれば、その後の五平の世界はもっとひらかれていったに違いなかろう。と評しておられる。

五平＝直の女性との接し方というか、生き方の一端に触れて、奇異の感を持たずにはおられない。。

（一九九八・一二・二一記）

徳永直と湯浅克衛

浦田義和

作家湯浅克衛は、中島敦と「朝鮮」京城中学時代に同級生で、東京へ移住して後、昭和十年代『人民文庫』等で植民地を題材にした新進作家として活躍するが、次第に国策的な大陸開拓文学に移行したと言われている。

ところで湯浅の処女作「カンナニ」を『文学評論』（昭和十年四月）に紹介したのが徳永直である。「カンナニ」は日本の植民地「朝鮮」京城近郊の水原を舞台にした日本人少年龍二と「朝鮮」の少女「カンナニ」との悲惨な初恋物語である。豪族の邸宅に雇われた誓願巡査の子である龍二、十二歳とその邸宅の門番の娘であるカンナニ、十四歳は近所のよしみで仲良くなる。ある日「朝鮮」の女生徒が日本人小学生達に嗜虐的ないたずらをされたことを訴える作文を発表したところ、それ以来龍二は高学年の日本人小学生達にいじめられることになり母親にも「朝鮮」娘とのつき合いを止められ、「カンナニ」と家出をするが、夜の山の猛獣が怖くなり帰ってくるというのが前半の内容である。『文学評論』での初出には次のような徳永直の断りが掲載されている。

付記、「カンナニ」は、作者から半歳余も預っていた作品であったが、その性質上、劫々発表に困難であった。こん度かくも無惨な姿で編集者に推薦した次第であるが、尚この後半は「万歳事件」が扱われている。「カンナニ」の作者は後半を別に構図を改めて書くと云っているから、またいづれ読者の目に触れる機会があると思う。一言作者及び読者へのお断りを兼ねて。

徳永直

そのカットされた後半は京城での「朝鮮独立万歳」事件が水原に飛び火し、騒乱の中で日本人の暴虐も目立つ。その中でカンナニが行方不明になり、カンナニの血塗られた小物が残されたという物語である。日本の植民地支配に反対する「万歳事件」と植民地の日本人に批判的な内容の「カンナニ」後半部を徳永直はカットせざるを得なかったのである。徳永直の「無惨な」というのはもちろん後半部のカットなのだが、発表された前半部でも伏せ字の部分がある。その伏せ字の部分を戦後発表されたノーカット版「カンナニ」より示してみると、次のような部分である。

「併合の前後から長く続いた暴動のこと」
「総督は朝鮮の王様みたなもの」
「父は日本人大嫌い、憲兵一番嫌い」
「天皇陛下が治めていなさる」
「家を潰された。持っていた田畑はいつの間にか新しい地主のものとなっていた」
「子供達を無理やりに普通学校に入れて」
「朝鮮少女に日本はいつもよく、朝鮮はいつも悪いように教えた」
「神功皇后の三韓征伐の話」
「そんなことだから、お前たちは国を失うのだ」
「これが、われわれの住んでいる土地、祖先の伝えた土地」
「『えーいこうしてやれ』にやっと笑って、しゃがみ込んで腿をあけ

た。そうして、木の枝をさし込んだ。ヒャーッと女の子が悲鳴をあげたので」

「女の子の股から血が二筋、白い腿に傷々しかった」

「朝鮮はうまく治まっていると聞いてきたら、そうでないので」

徳永直は植民地統治に触れる部分、天皇制に関わる部分、日本人小学生の嗜虐的いたずらのリアルな部分を伏せ字にしている。時代の制約である。しかし伏せ字のある前半だけでも植民地「朝鮮」への同情と植民地教育への批判が表現されており、徳永直や『文学評論』の意義を認めなければならない。

さて、次に徳永直と湯浅の関係を手元の資料から二、三拾ってみる。

一は『文学評論』昭和十年十二月のアンケート「今年度の作品と新人」欄である。

徳永直は感銘深かった作品として「炭坑」「一つの転機」「詫びる」「流れ」「蒼氓」「カンナニ」を挙げ、有望な新人として渡辺実、竹内昌平、藤島まき、湯浅克衛を挙げている。一方湯浅は感銘深かった作品を「下界の眺め」（武田麟太郎）、注目した雑誌『日暦』『現実』、好きな作家に片岡鉄兵、林房雄、武田麟太郎、新人として新田潤、高見順、平林彪吾を挙げている。

二は『人民文庫』昭和十二年十月の随想で湯浅が「時代の良心」として、林房雄、武田麟太郎、高見順、村山知義、島木健作と共に徳永直を挙げている事。

三はやはり『人民文庫』昭和十二年十二月の座談会「千百三十七八年の文学ーただ今は戦争の只中だ。この時、文学は、文学者は何をして来たか。又何を為すべきか。時代の良心は答える」である。

出席者は、荒木巍、井上友一郎、那珂孝平、新田潤、平林彪吾、湯浅、渋川尭である。

その中で今年活躍した作家としてまづ高見順が挙がったあと、湯浅が他に徳永直、丹羽文雄、伊藤整を挙げている。徳永直について新田が「八年制」より「飛行機小僧」がいいと言ったのに対して平林が「僕はこの人の作品に対するときは胡座をかいてかかるが、途中からそろそろと膝を揃えて座り直す。『八年制』も同様であった。（しかし）考えてみれば、僕の気持ちの中では失礼だが徳永直のような小説は捨てたつもりだった。何という退屈なー。暴言だが通俗小説だ、徳永直は自分の感情をプロレタリア思惟と云う定規に作り変えて、その定規で測りながら小説を書いている、どうにも救われない古さ、殊に『八年制』では登場人物もさっぱり描けてないし、何等新しい性格の創造もない」「しかし、こう強く否定しながら矢張り読まされるのだ」と述べている。那珂が「平凡素朴の持つ親切性、古い小説形式に対する僕達のノスタルジアといったものじゃない？」と応ずると平林は「実際、徳永直の現在居るところは通俗小説とすれすれのところだ、僕達はこれを突っ離さねばいけない、徳永直も僕もー我人共に。この古さ、この手垢のついた形式を叩き破らないことには来年の秋の小説の実りは無いような気がする」と述べ、新田も「そりゃあそうだ」と言ったのに対し、湯浅がたった一言『はたらく一家』はいいよ。そんなところはあるけどー」と救っている。

以上覚え書きとしておきたい。

平成浮浪者事情

植村勝明

最初乞食だと思った。だが通行人に金銭を求めるでも食を乞うでもないから文字通りの乞食ではない。あたりさわりのないように近頃では公園生活者とも称するらしい。

その公園は市の中心地にある。デパートに隣接し、商業、金融、交通その他（飲み屋街も軒を連ねている）この地区ほど便利なところはない。この公園も造りようによってはいい機能を発揮したであろうが、だいたいにおいてわが国の公園なるものは実になさけないしろものである。明治期、都市に公園を取り入れた際、庭園とも広場とも単に装飾的な空間ともつかない半端なものにしてしまった。ヨーロッパの都市を旅行してまず気付くのはそのことである。都市が成立する事情の違いもあるにはある。たとえば周知のようにゲルマン人が植民する場合、第一に教会を建て、そこを中心にして人々が住む。それが成長すれば都市である。教会の前には人が集まるための広場が当然出来てくるから、住民の往来集散はこの広場が中心になる。マルクトとかマルシェというのがそれであり、教会の役割が軽くなるにつれ、かえってこの広場が市の中心としての働きを持ってきた。公園はまた別のところに造るのである。

くだんの公園も単純な広場にすればどれほどよかったであろう。すっきりしているうえにいろんな役に立つ。ところが実情はさほど広くもない所に木を植えたりベンチを置いたり、奇怪なことに水たまりをしつらえて橋をかけたりである。もういいようのない愚弄な公園なのである。

せめて有効利用しようと考えた人たちがいたとしても不思議でない。前記の人たちしかりである。わたしが近くに――ここではなくこの近くに――移って来た当初、公園に常駐していたのは二人だった。まもなく一人になった。と、ある日その傍らで弁当を食べている別の中年の男がいた。服装はネクタイこそしていないが並である。旅行者だろうか。なにも知らずに（わたしたちも旅行中たまにやるように）公園で中食をとっているといった格好である。常駐者のほうはたまたま席を外していて、あとで帰ってきたのかもしれない。二人並んでというのは偶然なのだろう。

翌日になった。また二人並んで腰かけている。失業者だろうか。その翌日になった。二人で話をしている。常駐者が二人に戻った。

三か月が経った。メンバーが四人か五人にふえている。（日によって増減がある。）昨日など小春日和のもと酒もりをやっていた。焼酎の一升瓶を中心に、楽しそうである。わたしに声を掛けてきた。はじめわたしの後ろのだれかに向かっていっているのだろうと思ったが、後ろには誰もいなかった。わたしがいつもこの公園を突っ切って通るので顔を覚えたのであろうか。わたしが仲間に入りたがっていて、決心がつかずに行ったり来たりしているように見えたのだろうか。常々こどもたちが、お父さん、もっと服装をきちんとしなさい。といっていたのを思い出した。

新入りの浮浪者というか浮浪者見習いはどう見ても失業者である。話を聞いたわけではないので、断定はできないが、失業者といったがいちばんわかりやすい顔をしている。失望、執念、あきらめなどなど、いろんな過程を経てきたのであろう。ふっきれた分だけ、気持ちの落ち着きを得ているようにも見える。

失業者にもさまざまあり、ここに住むかれまたはかれらは数のうちからすればごく稀れなケースには違いない。ただし、失業者が行き着く一

つの極点として、他人ごとではないという側面があるようにも思う。
現在就業者の大半が失業の不安を抱いているという状況がある。屈辱を抱いて生きているというのと同じではないか。みじめなものだ。プロレタリアということばもルンペンプロレタリアということばも死語になった。しかしルンペンもどきのいきどおろしい気持ちはむしろ一般化していると見なければならない。とりあえず衣食住にはこと欠かないにしても、この暗く重い気持ちのあるなしは、幸不幸という面では雲泥の差なのである。

掌

大橋　三千代

『私は現在もときどきじっと自分の拳を見ることがある。』＊

愛を確かめたのも
この掌であった。
確かめたはずの愛を
拒否したのも
この掌であった。

乳房をむさぼる
我が子の
生命の塊を
しっかりと支えたのも
この掌であった。
母の
生命からの解放の冷たさを
つつみ込んだのも
この掌であった。

生と死の
終らない日常のなかで
この掌は
打たれた白い碁石のように
的確に全てを捉えていく。

たわむれの影さえも
この掌は
つかもうとする。
闇のなかで
生きていることを完成させようとする
この　て　は
したたり堕ちる時を
血に変えていく。

＊「最初の記憶」より

孟宗忌雑感

熊　懐　友　春

私が初めて孟宗忌に参加したのは第二〇回だった。碑前祭のあったこの道路は、今までに何回となく車で往来していたので、碑のあることは運転しながら車窓より見て知っていた。しかし誰のものか車を停めて確めたことはなかったが、これが徳永直の文学碑だった。

彼の名前は昭和三五年頃だったろうと思うが、「太陽のない街」の映画を職場の仲間と一緒に見た時に、原作者として出ていたのを記憶はしていたが、浅学菲才の身の悲しさ、彼が郷土熊本出身のプロレタリア作家であることも、他にどのような作品をどれ位著しているのかも、全く知らなかったし、格別の興味ももっていなかった。記念行事で、彼の二女津田道代さんの、父直に関する講話や作品朗読、スライド等により、又偲ぶ会に参加した方々との会話の中で、ようやく直の生涯や作品の一部を垣間見るようではあったが、理解することができて、参加して良かったと思った次第である。

その後彼の作品を読もうと思い、書店に行ったが皆無に等しく、市立図書館の郷土のコーナーにも一、二冊しかなく、日本プロレタリア文学集の二冊に収録されているくらいで、他の郷土の作家に比べて本当に少ない。少年期より家計を助けるために、肉体労働に従事しながら成長した経緯や、勤労の大切さが作品のいたるところにある。又勤労者の生殺与奪の権が、資本家や大地主に握られて、虫螻同然に扱われる様が赤裸々に描かれ、働く者の生存権を得るために立ち上る労働運動が、克明に記されている。貧しい家庭では、刻苦精励して働き、日々の糧を稼がなければ生きて行くことができない時代であった。動力と云えば自分の力と牛馬の力に頼る以外になかったのである。

現在の日本社会に於ては、肉体労働は「三K」と云われて若者に敬遠されている。物質的豊かさの中で、金銭感覚は麻痺し、贅沢なグルメ指向の生活に慣れて、心身共に柔軟になり、強きは避けんとし、困難からは逃れようとし、きれいな女に気を引かれ、女性にやさしいのが、男の身上とばかり心得ている昨今の青年達には、直の生涯を理解できるだろうか。

少子家族が多くなってきている今日では、いつまでも親離れができず、自立できない子供や、親もまた子離れすることを忘れて過保護になり、子供の成育の妨げになっていることも弁えず、子供の云いなりになるのが理解ある親だと思っているような過干渉が目にとまる。このような家庭環境に育てられた子供達には、直の説く勤労精神は、どこか異質の社会の出来事もように映るのではなかろうか。しかしながら、将来の熊本も日本も、若い青年や子供達が背負って築いて行くものである。彼の作品に接してもらいたい、だが今のように彼の著書が少なくては、熊本でさえも広く知られることには無理があると思う。

今年になって「妻よねむれ」が手に入った。多くの人に愛読され、又長い年月を経たのも重なってか、表紙も擦り切れ、紙面も茶褐色になり、活字も薄くなっているところもあるが、ゆっくり目を通すことができた。

戦時中は特高や憲兵に監視され、執拗につきまとわれ、食糧も不足する毎日を、妻として彼を支え母として一男三女の家庭を維持してきたが、結核性肋膜炎が病気の発端で、一進一退を繰り返しながら二二月に及ぶ闘病生活、担当の医師も次々に応召され「戦争さえすめば……」と口癖のように云っていた。家族による必死看病の甲斐もなく、終戦の報も知ることなく悪性貧血症という病名で永眠した。直より五才年下の享年四二才だった。亡くしてようやく思い知らされるのが、妻のありがたさやその存在価値の大きさである。自分に尽してくれた妻に、報いてやるこ

とのできなかった悔恨の念と、戦争さえなければもっと幸せに生きたことであろう妻への鎮魂の作品である。

東京から疎開した先が、亡くなった妻の育った東北地方である。妻トシヲもそこで七歳にしてみなし児となっている。本来なら疎開先は、生きている自分が育った熊本地方にするのが妥当のように思うのだが、直にとっては熊本は、身の置く所とてない冷たい針の莚でしかなかったようだ。

しかし、その熊本では具眼有志の方々の努力によって、徳永直の会ができて没後二〇年には顕彰する文学碑が竜田山の麓に建立されていて、毎年命日の二月一五日には孟宗忌として記念行事が温かく続けられている。来年の命日には生誕百年祭としての行事が堂々ととり行われる。誠によろこばしいことである。徳翁も泉下でよろこんでいることと思う。

徳永直はこの激動の時代を生き抜き、彼の文学と行動によって歴史を推進する歯車の役目を果たしたのではないか。とは言うものの彼には弱点や問題にすべき所も無い訳ではなかったけれど。

ところで現代はどうであろうか。政治腐敗はとどまる所を知らず、日本経済も行詰って人々の生活を苦しめている。ここに第三の維新が求められている所以がある。

もし今徳永直が生きていたら何を考え、何をなしただろう。彼はきっと彼の文学と行動をもって、アメリカの従属から脱して独立した日本、それに独占資本や大企業の利益に奉仕せず、人々の利益を守る日本の建設に力をつくしたのではないだろうか。

「――饅頭でも喰おうかい」

汗を拭き拭き床几に腰かけなおして、ホウッと溜息ついた。私は母の溜息にいろんなものがあるのを知っていた。しかし今の場合は幾らか諦めをふくんで、深い谷間へ誘いこむような満足の溜息であった。

「ぬしも腹が減ったばいな。ウン、も一つ喰えや」

黒い蕎麦饅頭を抓んで私に握らせた。そんなときの母は、買出人と争ってる母でもなく、金の勘定をしている母とも異っていた。母の眼からは刺々しい光りが消えて、遠いところから私のところへ惶ただしく戻ってくるようであった。しげしげと私をみつめてささやくのである。

「もうええかい、ウン?」

「もうええ」

私はいちどにもどってくる母の愛情に、あぶなく溺れそうで、そっぽむいて答えた。

「最初の記憶」より

もし徳永直が今生きていたら

木庭克敏

過去をふり返った時、明治維新が不完全ながら時代を画するブルジョワ革命であった事がわかる。明治維新から現在まで、明治、大正、昭和、平成の四つの年号に区分される訳だが、勿論この年号には歴史的に何んの意味もない。

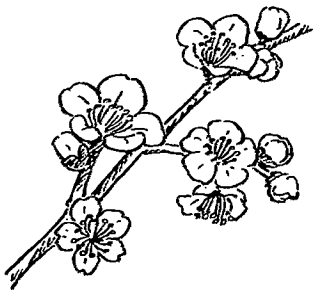
第二の維新というのは一九四五年の敗戦であると思う。何故ならこの時、それまでの天皇制専制政府がアメリカをはじめとする反ファッショ政治勢力によって倒され、まがりなりにも民主主義が導入されたからである。

芽木太る

坂本　美津子

年輪をたたみ山河は冬に入る
野地蔵に柊花を零しけり
冬ざれの黄昏色に文学碑
雲走る古戦場跡冬寂ぶし
石蕗黄に日ざし明るき仰松軒
白川も街行く人も冬の貌
凍空に汽笛千切れんばかりなり
寒茸の樹の上にある蒼き空
寒の雨通り町筋戸を閉ざし
一条の水の煌めき白魚来る
牡蠣打つや波の飛沫にあるリズム
碑前祭竹林の風冴えわたる
梅ふくらむ雨のそぞろに孟宗忌
碑に積みし小雪を手に掬ふ
熊本晴ニューヨークは吹雪とか
冠雪の根子岳箱石峠より
風が来て湖畔の落葉持ってゆく
赤々と枯野に沈む日を惜しむ
茜して千里満里の枯野原
小岱を突如襲ひし寒雷雨
モンペ穿き戦中戦後い生きて来し

葛湯煮てあと一息の稿急ぐ
茶を入るる陽当たりのよき冬座敷
干菜湯にひたり一と日の悔もなし
最終の汽笛尾を引く冬銀河
神の杉白一色の雪景色
大雪原魔法使の電車ゆく
永遠の大地へ野火の爆ぜる音
火の山を瞬く野火の焼き尽くす
聖界も俗界も今木の芽どき
結界の日渡り行や春寒し
雨を呼ぶ風に梅花の散りすだく
芽木太る二十一世紀への息吹



江津湖の花火

沢田博行

熊本県内で行われていた、ある読書感想文コンクールが、昨年廃止された。理由は応募者が少なくなってしまったから、という事らしい。読書感想文を書かせると、子供が本嫌いになるという話はよく聞くが、それは審査する側にも問題がある。

読書感想文コンクールに入選した作品を見てみると、すべて読んだ本を美辞麗句でほめたものばかりである。それもいつも決まった小説が取り上げられ、決まりきった感想がのべられている。大宰治の「走れメロス」は美しい友情譚であり、芥川龍之介の「くもの糸」は、人間の欲望のあさましさを描いた作品と相場が決まっている。大宰治も、芥川龍之介も自分の小説をこれだけほめられると、複雑な気分だろう。いや、自分の小説をちっとも理解してくれないと嘆いているかも知れない。

文学作品は常にひとつの立場にたって書かれる。だから、読む人によって反論が存在するはずだ。それなのに読書感想文はほめ言葉だけで綴られる。これは文学作品に限った事ではない。本というものは、作者の立場で書かれるものなのだ。だから、ほめるだけでは本当に評価したことにはならない。

プロレタリア文学にしろ、その他の社会派的な作品も私は、「江津湖の花火」だと思っている。江津湖で上がる花火は美しい。そのまま、花火だけを見ていれば何もない。しかし、その美しい花火を映している、江津湖の水は濁っている。その汚ない江津湖の水を描くのが、社会派的な作品である。その汚ない水も、夜空に上がる美しい花火も人間が生み出したものだ。

読書感想文の例でわかるように、物事を一面からしか見ないのは、物事の本質を見たことにならない。夜空に上がる花火だけを見ていては、人間の本質を見たことにならない。汚れた江津湖まで見てこそ人間の本質がわかるというものだ。

現代の日本人は、批判することと、議論するのが苦手だ。もしかしたらそれは、労働運動が挫折し、払った犠牲に見合うほどの収穫が得られなかったせいかも知れない。もし、そうだとしたら、私達は今こそプロレタリア文学を読まなければならない。労働運動のすばらしさを知るためだけでなく、議論することの大切さを知るために、徳永直の「太陽のない街」を読まなければならない。

徳永直の「八月十五日の日記」

千葉昌秋

「八月十五日の日記」（永六輔監修・講談社刊）を読んだ。一九四五年のその日、日本が無条件降伏して太平洋戦争の敗戦を迎えた著名人の日記を収録している。徳永直の日記がその中に載っている。

「〇さて戦争は終ったのだ。ああ終ったのだ。何だかまだ信じられぬ気がするくらいだ。東京の子供たちは無事だろうか。無事であってくれ。あと三日まって何ともないならば、たいてい大丈夫だ。焼けるか死ぬかしたら誰かが知らせてくれるだろう。尤も普通便で十二日、速達で十日かかるから、三日では無理か。

○あの放送を聞いた瞬間、なんと気のぬけた情景だったろう。空襲の被害から遠いこのへんでは、ことに地主百姓の家庭では平和回復が損みたいな気分がある……座敷にこの家の細君と息子が緊張してすわり、上り框（かまち）からあがってきた小作百姓の細君や老人が腰かけ、板の間にじぶんとならんで、やはり地主百姓の常会長がすわっていた。ぜんたいとして悲痛な気分があり、ふとった常会長はアナウンサーの感傷的な一句ごとにうんうんうなっていた。そのうち板の間にうつぶせになったから、泣いているのかと思ったら、五分ばかりすると寝息をたてていた。

○今後起りうること。

1 言論の活パッ化。新聞雑誌の創刊、再刊。
2 連合軍司令部をバックとする新人物の政治的登場。
3 労働団体の結成、失業者の続出。
4 軍内部の混乱。小規模クーデター。
5 朝鮮・満州における日本人の蒙（こうむ）る圧迫。
6 日本貨幣の動よう。
7 大量的日本労働者の海外移出。
8 今冬の食糧不足の問題化

ああ、それにしても今夜からゆっくりねむられる。」

興味をひくままに、かなりの部分を引用した。本書には一〇三人の日記が収録されているが、敗戦当日の八月十五日を克明にしるしたのは徳永直が群を抜いていると思った。

からだを固くしてポツダム宣言受諾を告げる天皇の言葉に耳そばだてている小作の農民たち。そのかたわらで、地主の常会長が、放送を聞きながら眠り込んでしまう。何とも奇妙な、そしてユーモラスな情景である。長いあいだ強いられた戦時生活の緊張が、いちどに溶け去ったのだろうか。直の作家の眼が、その場の雰囲気を鮮やかに捉えている。

〝十五年戦争〟と呼ばれる、日本のアジア侵略戦争を体験した人びとは、それぞれの思を抱いて敗戦を迎えたはずだ。私もその一人である。

私は十六歳、旧制中学四年生だった。福岡県の小さな町の軍需工場で、学徒動員で駆り出された級友とともに、空腹をかかえながら鉄分くさい構内を走り廻っていた。

正午に天皇の放送があるというので全員が広場に集まった。しかし、ひどい雑音の連続で内容は全くわからなかった。

「今の放送はソ連にたいする宣戦布告に違いない。いっそう作業に励むように」。工場長の指示で、再び汗まみれの労働が始まった。敗戦を知ったのは夕方おそくだった。

その瞬間、両肩にかかっていたずっしりした物体が、音もなく地面にすべり落ちたように思った。夜、家いえに明るい灯がまたたくのを見て、私はこれまでにない解放感を味わった。

いっぽう、当時十三歳だった妻は、北朝鮮の田舎町にいた。旧満州を脱出して帰国をめざす途中だった。「マンセイ」の歓呼をくり返しながら、トラックで走り廻る朝鮮人の姿を見ている。それから一年間、飢えと恐怖の逃避行の末に38度線を越えて日本に帰りつく。シベリア送りになった父とは別れ別れの帰国となった。

徳永直はこの日記を宮地県登米町で書いている。彼の妻トシは六月に亡くなり、直は二人の娘とともに妻の郷里に疎開する。東京はすでに瓦礫の街と化していた。文芸評論家の津田孝氏によれば、直はこの期間に「ひとりごと」と名づけた日記を書きつづけていたとある。

沖縄の日本軍が壊滅し、無条件降伏も時間の問題となっていたこのこ

ろ、直はいち早く戦後の日本について思いをめぐらせていたのだろうか。
それにしても、日記に指摘された予想の一つ一つが適格であったことに、私は強い共感を覚える。そのどれもが戦後の現実となった。
直はこのころから「妻よねむれ」の構想を考え始め、作品化に取りかかっている。「言論の活パツ化」を第一に掲げた直は十一月には帰京して新日本文学会創設に参加している。そんなことを考えながらこの日記を読むと、不思議な感動がつたわってくる。
（終り）

恩沢しろき

柘植周子

こつこつと死に近づくかこのあさも恩沢しろき鶏卵を割る
いちど二度さん度ならずも遠国の核実験に雲も怒れよ
暗躍の力にまさるものなしと蚤が古文書とびこえて消ゆ
忘れるしことも忘れてゐしわれを宥むるこゑは投網なるべし
罪科の数はた花のかずそれぞれの応分にしてよはひ古りたり
「養生訓」手より滑りて落ちたると父の眸のけぶらひにけり
はるかなるひとの死を聞くはるけさは月のそびらを覆ひゆく雲
あきかぜにおもひおこせば透明の風のふくろに溜まるひとの名
言ひかけて口をつぐめば蝉が啼く啼きてひと世のことながからむ
紙を焚くのちのあはれに風たちて墨染めといふ言葉もほろぶ

青史さん、ご苦労さまでした
——ますますのご活躍を

徳永光一

十一月半ば、しばらく振りで中村青史さんから、便りを頂いた。「……来春は定年退官です。……」とあり、「会報に何か一文でもお寄せください」とあった。中村教授は何時までも教授である、と思っていたいが、やはりそうもいかない。
とうとうその時が来たのだなと、感ひとしおであった。
青史さんは、熊本出身の文学者に広く関心を持たれているが、中でも徳永直文学に深く心を寄せる文学者であり、遺族としては貴重な人材が熊本に出現してくれたと、常々うれしく感じてきた。しかも、若き日の直にとっては畏敬の思いであったろう旧五高の、その教授として青史さんが出現してくれたのである。直が生きていれば、大変喜んだろう。
青史さんは、故高光義明さん達と共に、直文学碑を建立する運動を推進し、徳永直の会を発会させ、二十有余年、その運営に当ってこられた。
直文学は、本人の死後四十年の今日まで、ほとんど理解されぬ世状のままに経過した。その中にあって、しかも保守性の強い熊本の地にあって、青史さんは勇敢に行動されてきた。小さい例かもしれないが、「直の会」事務局を、自分の研究室名義で開設された。会の運営は総て募金によることが明確であれば、その事務局設置について、大学はかなりの自由があるというものの、勇気の要ることであったと私は思う。青史さんのこういう勇気は、人となりでもあろうが、やはり研究者魂と云うべきであろう。ある課題にとりくむ研究者の、研究内容が深く、確かであ

れば、ある程その研究者の意志は強靱となる。青史さんの勇気は、そうゆうものと不可分だと私には思われる。

会誌の発行、直の文庫本の発行、直展、孟宗忌、講演会などなど、学生や社会人と共に活動してこられた。青史さんの直文学の研究は、社会活動と結びついていることにも特色がある。近づいた第二十二回孟宗忌は「直生誕百年祭」として、盛大に行われることを大変嬉しく思っている。普通、大学教授が退官を迎える時は、一、二年前からいろいろ身辺整理を始めるが、それでも定年の二月、三月は天手古舞である。その最中、二月十三日に何時もの孟宗忌の何倍も手数のかかる「百年祭」だ。なみなみならぬ、青史さんの思いを感じる。

「徳永直は熊本である」という青史さんの講演は、「私としては、熊本の一般市民への最後講義のつもりです」と手紙には書かれていた。研究とその実践が現職の最後の瞬間まで一貫される。脱帽の他はない。その講演内容は、ぜひ九十九年中に公刊されることを願う。遺族、近親者としても生誕百年には、何か直の未発表稿でも、東京で公表できないかと考えている。

ともあれ、青史さん、長い間ほんとうにご苦労さまでした。

私は不肖の子で、文学を全く解せず、別の世界に進んできた。農学の一分野である土地改良学やその基礎学である土壌物理学などを研究してきた。研究者という意味では、青史さんと同類の人種になろうか。

五年前に岩手大学を退官して、今は七十一才になった。退官後は一、二の大学の非常勤講師などしながら、研究を継続してきた。退官すると研究環境は不自由になるが、雑務が減る分、研究に集中できるメリットがある。お陰で、この五年間の研究により、現職晩年の研究を、本格的段階までまとめ上げ、広く農学界の認知をうることができた。第二ラウンドへの意欲がつのる昨今である。

誰でも、どの分野でも、同じパターンにゆくとは思はないが、青史さん、研究者として、倒れて止む日まで頑張ろうではありませんか。

まずご自愛を、そしてますますのご活躍を念じます。

未筆ながら、会員の皆さんのご健勝も併せて祈念します。

（一九九八・十二・十二）

世相雑感

中田幸作

ここ数年右派権力に迎合する学者たちが、自由主義史観なる発言を繰り返して、侵略戦争や従軍慰安婦等の事実を否認している。これらのバックには当然後押しがいて、その一人が風見鶏元首相、も一人が産経新聞の元社長である。今次の大戦中、元首相は海軍主計士官で、元社長は陸軍経理将校。職務上ご両人は慰安所を設立した過去があり、前記学者たちとの結び付きも後押しも、その理由は一目瞭然であろう。自由主義史観の流れが涸れずに続いているのは後押しの健在のせいだろう。

初夏に東条英機の映画「プライド」が上映されて週刊誌や新聞を賑わした。昔、尽忠報国の少年兵だった僕は家にじっとしておれず、映画館に出向いた。ところが新聞案内で「シニア代金千円」がなぜか木戸口で「千五百円です」と値上げされ、学生券を買わされたのにはガツンときた。もともとケチな性分で高血圧の持病があるので頭に血がのぼり、あわや入棺かと思われたが平静をとりもどし、不愉快な気分で入館した。昼間といえ中には一塊のジイ・バアと若い一組の恋人という入りで、ざまぁ見ろと聞こえないように悪態をついて席に着いた。芸術は一人でな

いと純粋な鑑賞ができないので勿論単身である。

映画はさんざんだった。戦争中の戦意高揚を思わせる東条賛美映画だった。映画でも小説でも人間を描くには長所短所両面からが僕の物差しなので、下手な役者の演技もあって期待は大きく外れてしまい、こんなことでは「ダマされんぞ」と出てきた。

東条は自分の野望を通すため、満州時代から憲兵を使って反対派やその同類を投獄してきた。首相時代も憲兵政治を敷いた男だ。家庭の者には優しい親父だったとか、東京裁判で、勝者が裁く裁判と戦って日本の正しさを主張すると言ったからとて、敗れると予測された戦争を始めた東条を立派だったというわけにいかない。それでは無謀な戦争に駆りだされて戦死した兵士やその家族は救われない。東条が裁判闘争の自分を特攻隊員に擬するのは、（隊員が許してくれるならといっても）特攻隊員の死を冒瀆する事だと言わざるを得ない。

「プライド」の四、五ケ月後、今度は「戦争論」なる自由主義史観の一般人向け宣伝漫画が出た。おおげさな題にクラウゼヴィツの古典的な「戦争論」を思いうかべたが、こちらは「論」というほどの分析や研究ではない。個人的な偏った「十五年戦争」への思い入れの深い漫画、マンガなのである。なぜ無暴な戦争を始めたかという確とした考察もないマンガで、不愉快を通りこしてこんなデマを流してと腹が立つだけだった。ところがこの本を朝日の読書欄か何かで、東大大学院の若い学者が褒め、精神科医とかの女性が褒めているのには唖然とした。戦争を知らない世代とはいえ、知らないなら勉強をして意見をのべるべきなのに、ただ彼らの感覚で論ずる浅薄さ、高慢さに、まず自分の意識や精神にメスを入れてから始めろといいたい。

それに、メディアで取りあげる「プライド」や「漫画論」のいろいろの論争の中に、小さい囲みに署名入りで、これで「右傾化を語るな」とあるのが目にとまった。こういう手法が近頃変に多くなった気がする。一応正当論をのべながらその中の一ヶ所に、こんな反対の小枝が仕掛けられている。メディア側からすれば少数意見を大事にする公平さを示すフレーズかもしれないが、そこが一癖も二癖もあるところだろう。

先月の大矢野原演習場での米海兵隊と自衛隊の本県始めての合同演習で（まだ国会で審議されない新ガイドラインの先どりだが）実弾演習をするのに、町民の反対運動を報道しながらひょいと、合同訓練は「儀礼的な一種の親善試合」だと編集委員の署名入りで出ていたが小首を傾げる。小説の手法に「本当に言いたいことは表現しない」というのがあるが、万人むけのメディアなどはそうはいかないから小さな囲みで現すのだろう。囲みはたいてい為政者や権力への賛同意見になっている。

メディアが高等技術を使うなら政治家は教養のないだけ、明け透けて恥かしげもなく口にだす。例によって今回も米国は宣戦布告なしにイラクにミサイルを射ちこみ、空爆を実施した。それで日本政府や与党代議士は駐日米国大使が説明にくる前に米国支持を打ちだした。外国にいたボケ狸の棒読み首相も他国より早々と用意のメモを棒読みし、米国支持を打ちだした。何という手ぎわのよさだろう。実はそれが、前首相のアンパン橋龍が十ケ月前に決めていたことを外遊に持ってきていたというから仰天。現場や情況の確認説明を聞かないメクラメッポウの支持を打ちだしてみせたのである。米国から賞めてもらおうと。こんな首相や与党代議士の手で、国民は憲法違反の戦争に引きずりこまれるのだろうか。考えただけで、首筋に白刀を当てられるようにゾーッとする。

五十七年前日本海軍は宣戦布告の前に真珠湾を奇襲攻撃し、米国の激怒を買った歴史がある。その揚句原爆を落とされて非戦闘員まで惨殺された。それでも米国は「だまし討ち」を許さずカウボーイ根性丸だしで、東京裁判に戦犯容疑者を拘置するのに、「真珠湾攻撃時の東条内閣の一

員、外務大臣東郷重徳」とか、「真珠湾攻撃時の東条内閣の一員、商工大臣岸　信介」とか、わざわざ「真珠湾攻撃の」と冠詞をつけて連行した。「だまし討ち」した戦争犯罪人という増悪に満ちた表現だったのである。

連合艦隊司令長官山本五十六が真珠湾攻撃に出発する際くり返し「話がまとまったら直ちに連絡してくれ。どこからでも引き返す」と念を押し、たとい奇襲攻撃の予定でも宣戦布告前の攻撃は避けると意志を示したのである。結果的に宣戦布告が遅れ、「だまし討ち」になったが、山本は終生その事を悔んで死んだ。

それは山本の、日本海軍の負の伝統を継ぎたくないという考えの現われで、「だまし討ち」は米国を怒らせ、早期和平の戦略に支障をきたすという山本の深謀から出たものだったが。

例えば日清戦争は、軍艦浪速丸が朝鮮の東海岸豊島沖の清国軍艦への発砲が始まりだった。一説には清国輸送船への発砲というものもあり、これなら無防備の船舶を攻撃したという国際問題ものだが、この浪速丸の艦長が他ならぬ後の日本海軍の重鎮となる東郷平八郎大佐だった。清国への宣戦布告は発砲より一週間後だったというから、政府、軍内部でいろいろの激論が交わされたのだろう。

ところが日露戦争でも同じ事が起こる。

朝鮮の仁川沖をロシア艦隊が航行しているのに、日本艦隊が奇襲攻撃をかけ、翌日宣戦布告を告げたのである。こうみてくると、日本海軍の戦闘開始はどれも宣戦布告前に仕掛けられたと考えられる。これは日本古来からの合戦が「夜撃ち朝駈け」の奇襲戦法で勝利を物にした伝統の名残だろうか。この手法は現代の警察の重要犯人逮捕の場合にも「夜撃ち朝駈け」になっているのにも通じている。

米国は五十七年前の日本の非近代性、ルール違反を厳しく咎めたが、時代が変り、各国が核武装をした現代は、宣戦布告も通告の義務も先制攻撃有利の前になくなり、「仁義」なき破滅の戦いの時代になったようである。

超大国の驕りでここ何年か布告なしの一方的な戦争が仕かけられている。これが続けば大変なことになる。日本はそんな国との同盟関係を解き、憲法に則っとった平和な国を再構築する時がきたのではなかろうか。

徳永直の思い出

藤本憲信

一九五三年、私、大学一年の折、学内の掲示板に石川啄木祭の案内が出た。梅雨に入る前のころだったかと思う。その日も小雨であった。世田谷・中里の民家で開かれるとのことで、朝から訪ねて行ったが、民家がどこなのか分からず、行きずりの女性に道を尋ねたことを覚えている。民家はすぐ分かった。大きな古い家の二階であった。そこに集まっていたのは、中野重治、徳永直、椎名麟三、渡辺順三、間宮茂輔、原泉、といった面々であった。その他の人たちは有名無名の文学者たちであったろう。大学生は私一人で、しかも入り立ての一年生。心細かった。

啄木祭と称しても、粗末な座り机の上に、啄木の写真と花が供えてあり、原泉（中野重治の奥さん、女優）がその机の前で啄木の詩を朗読するといった程度のものであった。その年、初めての上京直後、四月半ばごろ、神田共立講堂で開かれた小林多喜二祭は超満員で、最後方の立ち見席から、講演中の中野重治の姿がやっと見えマイクの声が聞こえるだけであった。その盛況ぶりと比べると、今日の啄木祭の何とささやかなことであろう。朗読のあとは右の作家・評論家を中心に座談会となった。

中野重治については、『歌のわかれ』を読んで、短歌的な叙情の世界と決別し、何か凶暴なものに立ち向かおうとする若者の正義感に打たれ、詩人として、魅力を感じている人であった。椎名麟三は『深夜の酒宴』『重き流れの中に』『自由の彼方で』で知っており、特に『自由の彼方で』はこの年『新潮』五月号にその第一回分が掲載されたばかりであった。渡辺順三は近代短歌史の著者であるが、あまり馴染はなかった。間宮茂輔はその時初めて知った作家であった。原泉の啄木詩の朗読はすばらしかった。きれいなひとであったと記憶するが、後年、映画やテレビで観るふけ役の女史は、性格のきつい人に見えた。その時の清澄な凛とした声とはあまり似ていないと思えた。徳永直はわが郷土を代表する作家、プロレタリア文学運動の戦士としての栄光と挫折とが一当時の社会的環境のもとでは、「挫折」という言葉を冠することは、あまりにも残酷であるーずしりと肩に重かった。

これらの人々をまのあたりにして、私は胸にふるえのようなものを感じたほどであった。中野重治はこの時のあと頃からたしか雑誌『群像』に『むらぎも』を連載し始めていたと思う。『歌のわかれ』の主人公と同じ名前の片口安吉が東大の新人会と出会って、これから社会の劣悪な状況の中に身を投じていこうとする場面もあった。中野の眼はどこまでも透徹していて、世の中の悪のすべてを見通しているように、理知に輝いていた。この人の心はどこまで深いのであろう。容貌も知性の固まりという感じである。

椎名麟三は当時の流行作家、関西言葉をすっかり東京言葉に置き換えてしまって、間投助詞に粘っこい抑揚のある、あの「ねえ」を連発しながら、文学論にいかにも得意げであった。椎名に比べると、中野は重々しい。誰からの質問にも的確に、時代背景の中から浮かび上がってくるような、切れの深い言葉で答えた。渡辺順三はもっぱら啄木の短歌論に及び、歌は労働＝生活の中から叫びとして生まれ出るものであることを説いていたようだった。間宮茂輔は自作を語った。自作と言っても、私は彼の作品を読んだことがなかった。原泉は朗読のあと、自分のお役目は終わったとばかり、さっさと引き上げてしまった。そのせいか、きれいな人とは思ったが、あまり印象に残っていない。

私は文学者たちの深い深い討論の流れを弁えず、そのうねりをまるで無視して、断ち切るように、次のような質問を中野重治に向かって発した。無論、田舎者の、高鳴るドキつく心臓の鼓動を必死に押さえてのことである。

「先生は、詩誌『驢馬』の頃は、堀辰雄らと一緒に詩作をしておられたと思いますが、堀辰雄とはどのような事情で、いつ頃お別れになりましたか。」

無謀な質問である。中野重治はすかさず、

「僕は堀と別れたことなんかないよ。堀とはずっと一緒だった。」

と言った。

並みいる文学者たちの間からドッと哄笑が沸いた。私は真っ赤になった。得意の質問のつもりであった。哄笑はしばらく収まらなかった。私はその哄笑を突き破るべき勢いを失っていた。しかし、中野重治の言葉には、私をあざ笑うような響きは含まれていず、私を正視して誠実に答えてくれた。うれしかった。中野重治という作家がますます好きになった。中野はこんなつまらぬ質問など、日数の経過とともに忘却の彼方に置き去りにしたはずであるが、何かに、この時のことを記していて、ほんとうにありがたい気持ちさえした。

徳永直はと言えば、こんな賑やかな文学論議の、誰でもいつでも発言できる自由な雰囲気をよそに、二間か三間続きの広々とした部屋の片隅に離れて、一人正座し、沈黙したままである。私は絶えず気になって、

徳永直の方に視線を注いだ。口は堅く結ばれ、無表情に近かった。『太陽のない街』のことを語って下さればいい。自分の作家体験を披露して下さればいい。熊本のことが出てくれば、なおうれしい。私は待ち続けた。が、遂に氏の言葉は聞かれなかった。

午前十時頃から始まって、帰りは昼下がりになっていたと思うので、おそらくは五時間くらい座談が続いたのだと思う。氏はその間、遂に言葉を発しなかった。討論のあとは自由座談となり、私は徳永直の近くにいたので、

「私も熊本です。作品の事実と虚構の問題について、どのようにお考えになりますか。」

などと、お尋ねしたいと思ったが、どうしても話しかけることができなかった。氏の長い間の沈黙の圧迫を受けたのかもしれない。また、氏の中に飛び込んで行こうとする勇気が、私の中に欠如していたのかもしれない。おそらくは後者の方であったろう。沈黙には堅い殻のようなものはなく、静思の状態だったのだから。今、想い起こしてみても惜しい。あの時話しておけばよかった。氏もおそらく熊本人と出会って喜ばれただろう。なぜ、あの世紀のチャンスを逃がしたのか、惜しんでも惜しみきれない。私は私の心臓を恨む。文学者たちの笑いにすっかり縮み上がっていたのか。周りの人たちはみんな偉く見えた。百戦のつわものたちだったに違いない。その雰囲気に呑まれたのが悔しい。恨めしい。何度悔やんでも取り返しのつかないことである。

先年の孟宗忌の折、徳永直の御令嬢がおいでになった。その際、私は大学一年生のこの時のことを御令嬢にお話しした。が、御令嬢は、ありふれた一事としてしか受け止めて下さらなかったようだった。私の気持ちが伝わらないもどかしさを感じた。しかし、それはそれでよかった。

ところで、佐多稲子が中野重治の看病のこと、思い出を書いて、『夏の栞ー中野重治をおくるー』で、毎日芸術賞を受けたのは、一九八三年のことである。私は佐多氏宛にお祝いと、この啄木祭の思い出をしたためた。すると、お礼のあいさつ状が届いた。次はその便りの一節である。

『夏の栞』をお読みになったとのこと、ありがたくおもいます。学生でいらっしゃった頃の啄木祭のときのお話私までなつかしく拝見しました。出席の人ですが、みなさん故人になられました。原さんおひとりは別ですが。

（一九八三・三・三一）

その佐多稲子も過去の人となった。

私は生活と闘い、己れと闘い、社会と闘い、血の滲むような思いで文学を創造した作家たちが好きだ。

事務局移転のお知らせ

中村教官退職のため中村研究室の事務局は三月一杯で閉じます。新しい事務局は左の通りです。便利のいい所です。コーヒーもおいしい喫茶店です。お立ち寄り下さい。

記

〒八六〇ー〇八五五　熊本市北千反畑五ー一三

画廊喫茶　南風堂内　熊本・徳永直の会

＊電話（〇九六）三四三ー九六六四　FAX（〇九六）三四四ー三二三五

郵便振替は〇一九四〇ー二ー一一四九八　従来通り。

徳永直年譜

津田孝編

一八九九年（明治三十二年）

一月二十日、熊本県飽託郡花園村（現在は熊本市内）に生れる。父辰次郎（役場名は磯吉）、母ソメの長男。辰次郎は作男。ソメも地主のもとで働いていた女中であった。

一九〇五年（明治三十八年）　六才

この年までに、家族は飽託郡黒髪村に移り住み、四月、黒髪尋常小学校に入学する。両親は、一、二反のわずかな小作のほか、百姓その他の日雇などをしていたが、辰次郎が日露戦争に輜重輸率として出征して負傷し、賜金百五十円をもらってから、その資金で荷馬車引きをはじめた。

このころから小学校を中退するまで、竹細工、馬の飼料の草刈り、荷馬車引きなどの労働をする。

一九一〇年（明治四十三年）　十一才

九月、小学校六年で中退。熊本市中島印刷工場の見習工となる。

一九一二年（明治四十五年）　十三才

このころから、少しでも高い賃金を求めて、九州日日新聞社、九州新聞社、熊本毎夕新聞社などを転々とし、文撰工として働くかたわら、夜間中学にかよって海軍兵学校にはいることをめざして苦労する。眼をわるくすると、その間だけ米屋の丁稚などをした。

一九一七年（大正六年）　十八才

眼を決定的にわるくして文撰ができなくなったので熊本煙草専売局の職工となり、ついで熊本電気会社第一発電所（立野の黒川発電所）の職工となる。

この年、ロシア革命がおこる。専売局で知り合った米村鉄三という文学好きの同僚（三才年長）から影響を受け、クロポトキンの「青年に訴う」、ラッセルの論文、ソログープの「毒の園」、アルツイバーセフの「労働者セイリオフ」、ドストエフスキイの「死人の家」その他、ゾラ、モーパッサン、イブセンなどをよむ。

一九一九年（大正八年）　二十才

米村鉄三および、従弟にあたる印刷工角田時雄たちと、労働者ばかり、三、四人が中心となって「労働問題演説会」を計画する。ポスターはりをして熊本憲兵隊にかぎつけられ、熊本警察署に検束される。このため黒川発電所を首切られる。このころから労働者としての階級的な自覚が芽生えはじめる。

一九二〇年（大正九年）　二十一才

ふたたび九州日日新聞社で文撰工として働く。熊本印刷労働組合創立に参加。第一回熊本メーデーに参加。同年、第五高等学校にきた加川豊彦を招いて、「労働問題演説会」を開き、自分も演説をする。

一九二一年（大正十年）　二十二才

長崎県島原町に憲政会系の新聞社が新設され、活字、機械とともに雇われて、島原半島にわたる。社長たちボス連の有明湾埋立工事に関する悪事をバクロし、待遇改善、賃上げをスローガンとして二日間のストライキをおこなう。このため暴力団にとりかこまれて、暴力的に船にのせられて追出される。

五高の学生たちが新人会熊本支部をつくったとき、これに参加する。

一九二二年（大正十一年）　二十三才

熊本では「アカ」ということになって雇ってくれる工場がなくなり、

上京して大森の前衛社に一カ月食客となる。のち芝口の民友社に植字工となり、数カ月そこに働いたのち小石川の博文館印刷所（共同印刷の前身）の植字工となる。出版従業員組合の創立に参加し、博文館支部責任者となる。マルクスの「賃労働と資本」、「賃金、価格および利潤」などを五、六人共同で研究する。

一九二三年（大正十二年）　二十四才

出版従業員組合の先輩である青野季吉、金子洋文、新居格、佐々木孝丸などに小説をよんでもらう。

九月、関東大震災のため職場の建物が崩壊し、死者四十七名、重傷者百七十数名をだす。犠牲者にたいする社会の仕打ちに抗議し、ストを計画して職場代表は小石川植物園に集まったが、武装憲兵隊に襲われてやめる。

一九二四年（大正十三年）　二十五才

看護婦佐藤トシヲと結婚。

博文館印刷所の七日間にわたるストライキに参加。三割賃上げ、深夜業五割増しなどの要求を獲得し、ひきつづいて従業員組合を結成する。関東印刷労働組合と合同し、日本労働組合評議会に参加する。

一九二五年（大正十四年）　二十六才

組合の機関紙にはじめて小説「馬」を発表する。組合で小説を書くことを非難されて一九二八年まで小説を書くことを断念する。

〈小説〉「馬」（六月七日）「戦争雑記」（九月十日）「あまり者」（十一月一日）

一九二六年（昭和元年）　二十七才

一月、共同印刷ストライキに参加、解雇者の一人となる。

一九二七年（昭和二年）　二十八才

解雇者中の有志数人で、解雇手当で小印刷工場をつくり、生産組合運動をおこしたがうまくいかず、臨時働きをして歩く。

八月、長男光一生れる。

一九二八年（昭和三年）　二十九才

暮ごろから「太陽のない街」を執筆しはじめる。

〈小説〉「眼」（十月八日）

一九二九年（昭和四年）　三十才

二月に創立された日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）に参加する。林房雄によって「太陽のない街」が「戦旗」に紹介される。

十一月、長女洋子生れる。

〈小説〉「太陽のない街」（三月、戦旗六月号～十一月号）、「能率委員会」（九月）

一九三〇年（昭和五年）　三十一才

このころから職業的な作家としての生活にはいる。

〈小説〉「失業都市東京ー太陽のない街第二部」、「赤い恋以上」（新潮一九三一年一月号）、「戦列への道」（五月四日）「赤旗びらき」、「赤色スポーツ」、「嵐をついて」「麦の芽」

〈評論・雑文〉「〝太陽のない街〟は如何にして製作されたか」（四月）

一九三一年（昭和六年）　三十二才

世田谷経堂五二番地へ転居。

〈小説〉「輜重隊よ前へ！」（三月？）、「未組織工場」（十一月）、「ファッショ」（十一月、中央公論一九三二年二月号）、「女子舎監の日記」（十一月）

〈評論・論文〉「プロ文学における感情の問題ープロ作家に対してー」（一月）、「読者諸君へ！」「〝輜重隊よ前へ！〟の序文」（三月二十日）、「新恋愛は工場に芽生える」（五月）、「初夏の抱負」（五月）

一九三二年（昭和七年）　三十三才

六月、次女みちよ生まれる。

〈小説〉「山一製糸工場」（四月）、「火は飛ぶ」（七月）、「銃後」（八月）、「文学サークル」（中央公一九三三年一月号）「拡がる戦線」、「阿蘇山」

〈評論・雑文〉「文学新聞は作家を生んだ―小説を中心として―」（一月、プロレタリア文学二月号）、「プロレタリア文学の一方向」（二月）、「小説はいかにかくべきか」（二月）、「仮面を剥ぎつつ」（五月）、「窪川鶴次郎について」（七月）、「林の〝青年〟を中心に」（九月）、「逆浪に揉まれて」（十月）

一九三三年（昭和八年）

〈小説〉「武士と資本家」（三月）、「島原女」（八月）、「母」（十月）

〈評論・雑文〉「伏字問題その他」（一月）、「明治維新に関する歴史小説」（三月）、「〝大衆文学形式〟の提唱を自己批判する―併せて、貴司山治の所論に触れつつ」（四月）、「創作方法における新段階」（五月）、「課せられた桎梏―最近の感想」（五月）、「作家を志願する人々について」（六月）、「プロレタリア作家の経済生活について」（七月）、「創作方法上の新転換」（七月、中央公論九月号）、「〝ナルプ〟に対する希望」（九月）、「唯物弁証法読本」（九月？）［渡辺順三と共著］、「唯物弁証法読本」自序」（九月）、「創作方法に関する感想」（十月）、「座って話す」（十一月）、「リアリズムについて」（十一月）、「大家の末路―復古主義への前奏」（十一月）、「一九三四年への歩み」（十二月）

一九三四年（昭和九年）　三十五才

二月、日本プロレタリア作家同盟が解散する。

同月、ナウカ社から創刊された「文学評論」の編集に相談として参加する。

七月、三女街子生れる。

〈小説〉「私の黎明期」（中央公論四月号、文学評論七月号）「冬枯れ」（十一月、中央公論十二月号）、「スケッチ三題」（十二月、文学評論一九三五年新年号）

〈評論・雑文〉「ゴリキーに関する断片」（一月、文学評論三月号）、「新らしき出発―プロレタリア文学の新動向」（三月）、「〝創作技術に関する問題〟の提唱」（文学評論四月号）、「恥かしい〝序文〟」［評論集「新らしき出発」の序文］（三月）、「春さむし」（文学評論五月号）、「歩いて来た道」（人物評論？文学評論五～七月号・九～十二月号）「ソヴエト芸術映画〝国境の町〟をみる」（六月、文学評論七月号）、「しじみとり」（文学評論八月号）「〝太陽のない街〟近況」（文学評論九月号）、「纏らぬこと二三」（十月、文学評論十一月号）、「三四年度に活動したプロ派の新人達」（十一月、文学評論十二月号）「感ずること二、三」、「プロ文学における感情の問題」、「佐々木俊郎について」

一九三五年（昭和十年）　三十六才

前年における作家同盟の解散後、神経衰弱がひどく、青山脳病院、国府台病院、東大附属病院神経科などでみてもらう。

〈小説〉「梶川ツルの死」（二月）、「訪れて来た子供」（九月）、「弱虫」（十月、文学評論十一月号）、「黎明期［序篇］」、「百姓花嫁」「工場新聞」、「逆流に立つ男」、「女の産地」、「最低の組織」（新潮六月号）

〈評論・雑文〉「まづこんなことをやりたい」（一月十一日、文学評論二月号）「〝雑誌文学〟からの解放」（三月）、「東北凶作巡回記（青森県の部）」（文学評論二、三月号「〝奇傑パンチョ〟を観る―近頃の興味ある映画―」（文学評論三月号）「児童と保護者と先生と」（三月）、「香木直之について―推薦の言葉」（文学評論臨時増刊）、「渡辺寛について―推薦の言葉―」（文学評論臨時増刊）、「トマト」（五月）、「ラジ

オ週評」五月「小説勉強」（文学評論四～七月号）「〝炭坑〟の表現と構成について」（文学評論八月号）、「スポーツについて」（八月、文学評論九月号）「労働者作家の抬歌」（十月、文学評論十二月号）「人選小説選評〝電鍵〟について」（十二月、文学評論一九三六年新年号）「島木の作風について」（十月、文学評論一九三六年二月号）

一九三六年（昭和十一年）　三十七才

＜小説＞「一つのタイプ」（改造四月号）、「黎明期ー第二部ー」（文学評論一～四月号）、「彼岸」（七月）

＜評論・雑文＞「スケッチと報告文学について」（二月）、「労働者の〝才能〟の問題」（二月）「家を建てた」（二月）、（文学評論三月号）、「〝辛抱づよき者へ〟ー詩集、松田解子著」（文学評論三月号）「〝職場スケッチ〟についての感想」（三月、文学評論四月号）「農家での十日間」（三月、文学評論五月号）、「花を見た春」（四月）三田新聞四月二十四日号）「自然について」（六月）、「ゴリキイのもつ労働者性」（六月、文学評論八月号）「早慶戦ルポルタージュ」（十月）

一九三七年（昭和十二年）

「太陽のない街」を絶版する旨、新潮社に申送り、読売新聞のインタビューに応じて声明をのせる。

＜小説＞「T君の犯罪」（一月）、「飛行機小僧」（三月、中央公論五月号）、「八年制」（三月、日本評論六月号）、「はたらく一家」（六月）、「本槿のある村」（六月）、「技師阿波忠助」（十月）

＜評論・雑文＞「東京大相撲春場所ルポルタージュ」（一月）「保護者の弁」（一月）、「カブト町風景」（三月）、「新人作品の特徴」（三月）、「日本文学の危機」（北海タイムス五月九、十一、十二日号）、「主題の新しき展開」（都新聞六月九～十二日号）、「長編小説雑感」（関西学院新聞十一月二十日号）、「冬を越す文学」（十二月）、「報告文学の一形式ー進歩的文学の一形式」

一九三八年（昭和十三年）

＜小説＞「父親の覚え書」（四月）、「陽子・道代・町子ー父親の覚え書」（五月、文芸七月号）、「蜘蛛」（七月）、「最初の記憶」（八月、新潮十月号）、「電車の中で」（十月）、「悪友」（十二月）

＜評論・雑文＞「おぼこ様」（六月）、「若き世代に望む」（十一月）、「大きな転換期ー大衆文学と読者の問題ー」（帝国大学新聞十一月十四日号）、「兄弟子を真似る」（十二月）、「梅」（十二月）

一九三九年（昭和十四年）　四十才

＜小説＞「藁人形」（一月）、「近所界隈」（一月）、「他人の中」（新潮四月号）、「先祖まつり」（七月）、「読者たち」（十一月）、「ある患者の話」（十一月）、「九日の宿」（十二月）、「藪の中の家」

＜評論・雑文＞「梅と桜」（一月）、「先遣隊」「［先遣隊］まへがき」（二月）、「私の手帖」（二月）、「海を渡る人々」（二月）、「観客の立場から」（二月）、「〝くれなゐ〟について」（二月）、「文学の健康性」（三月）、「映画の健康性」（三月）、「文芸時評」（中外商業新報三月二九日～四月二日号）、「希望と努力」（四月）、「〝筋〟は〝通俗〟であるか」（五月）、「笑ひ」（六月）、「村の景色」（六月）、「鮎一尾」（六月）、「ある日の私」（十月）「きのこ汁」（十月）、「たかくそしてひくく」（十月十五日）、「秋つれづれ」（中外商業新報十月十五日号）、「〝大陸文学〟と〝満州文学〟のタイトルについて（十一月）、「創作日記から」、「満州で文学する人々へ」、「作品と作家の間」、「〝無智〟と〝金銭〟について」「新人と旧人の間ーある抗議にも答へてー」「男の一面について」

一九四〇年（昭和十五年）　四十一才

五月、朝日新聞社主催の「日本文化史展」をみにゆく。このころか

ら上野図書館、九段下の大橋図書館にかよい、印刷に関する文献をよみあさる。

〈小説〉「東京の片隅」（文芸三月号～七月号）、「男の中で」（七月）、「ある特派員」（八月）、「見舞」（十一月）、「海の上」（十一月）、「こんにゃく売り」（十二月）、「ひとりだち」［発表当時の題名は「はたらく人々」］、「結婚記」、「土に萌える」、「海をわたる心」、「青い風」、「暗い町」、「浅草の客」、「世界の公園」、「移動する民族」

〈評論・雑文〉「文学修業といふこと」（二月）、「通俗との岐めー純文学擁護のためにー」（三月）、「文芸時評」（都新聞五月三十日～六月三日号）、「六月の感想」（六月）、「医者と小説家」（七月）、「［東京の片隅］あとがき」（八月）、「夏」（九月）、「弟のこと」（九月）、「故米村鉄三について」（九月）、「特徴を生かすこと」（十月）、「〝家庭にかへる〟意味」（十一月）、「〝生活を考へる〟について」（十二月）、「文学的な育児観」（十二月）、「二人のはたらく女性」（十二月）、「特急さくら」、「〝子供の一日〟その他」、「グウテンベルグその他」、「勤労者娯楽の今昔」

一九四一年（昭和十六年）　四十二才

夏、済生会病院に三谷幸吉をたずね、翌日、三谷幸吉から「本木昌造、平野富二祥伝」他二冊をゆずりうける。

〈小説〉「風」（二月）、「罪ある子供」（二月）、「宿の一夜」（三月）、「自然について」（四月）、「はたらく歴史」（六月）、「ゴンチャロフのみた日本人」（八月）、「野菜の話」（九月）

〈評論・雑文〉「他人へ通ずる道」（一月）、「ちょんかけと木インテン」（二月）、「家庭の一日」（四月）、「〝家庭〟と〝愛情〟」（四月）、「あるときの尾崎士郎」（五月）、「勤労者の文学」（都新聞六月十九～二十一日号）、「［評論家〝作家と生活〟］あとがき」（七月）、「夫婦の資本」（九月）、「駄馬によせる」（九月）、「文芸時評」（九月）、「食ひ物について」（信州合同新聞十月五、七、八日号）、「明るく生いてたてよ」（十二月）、「生活を愉しくためにー文化時評ー」、「〝嫌な奴の登場〟について」、「痩せる小説」

一九四二年（昭和十七年）　四十三才

〈小説〉「はたらく心」（七月）、「五つの話」（八月）、「幼ない記憶」［前年発表した「はたらく歴史」を改作して致題したもの］「イネちゃん」、「悪い夢」、「三人」、「豆戦士のレポート」、「甚左どんの草とり」、「泣かなかった弱虫」、「居眠り千葉さん」、「こんにゃくを売る子供」

〈評論・雑文〉「三度めの雪」（二月）、「私の増産計画」（二月）、「［をさない記憶］まえがき」（夏）、「人間は働かねばならない、働くには辛抱が必要だーこれが私のうけた家庭教育であるー」（女性生活九月号）、「この文を書いた感想」［〝甚左どんの草とり〟の序文］

一九四三年（昭和十八年）　四十四才

〈小説〉「光をかかぐる人々」（？）

〈評論・雑文〉「［光をかかぐる人々］作者言」（五月）、「勤労姿態の美について」（五月）、「小説勉強」［数年のうちにかきため小文集た］、「［小説勉強］はしがき」（六月）

一九四四年（昭和十九年）　四十五才

「光をかかぐる人々」の下巻のための仕事をつづける。

一九四五年（昭和二十年）　四十六才

六月、妻トシヲ死ぬ。

七月、みちよ、街子を連れて、宮城県登米郡登米町に疎開する。

八月、太平洋戦争終結。

十一月、東京へ帰り、新日本文学の創立に参加する。

〈小説〉「小説も飢える」（十一月五日）、「嘉平の活字」（十二月）

〈評論・雑文〉「停戦発表の日」（十二月、新日本文学創刊準備号）

一九四六年（昭和二十一年）　四十七才

日本共産党へ入党する。

「太陽のない街」の絶版についての自己批判を東京新聞に発表する。

〈小説〉「飛躍を阻むもの」（新人三月号）、「町子」（二月）、「がま」（四月二十三日）、「追憶」（九月）、「きつねにだまされる話」（十月二十三日）、「上海へ」

〈評論・雑文〉「［唯物弁証法読本］復刻の序」（一月）、「菊田さんへの手紙」（一月）、「［小説勉強］再刊の序」（五月）、「ルポルタージュについて」（十一月、民衆の友一九四七年二月号）「或る風景」（十一月、朝日新聞）、「ある話」（十一月、日本協同組合新聞）、「新段階の勤労者文学」（十一月、朝日新聞十一月十八日号）、「文芸時評」（十二月、日本婦人新聞）

一九四七年（昭和二十二年）　四十八才

〈小説〉「本田さん」（四月）、「あぶら照り」（十二月）、「白い道」（十二月）、「妻よねむれ」（新日本文学）、「一つの時期」（春）、「敗戦前」「世界の公園」、「研究会にきた男」

〈評論・雑文〉「国鉄の官業性」（二月二十九日）、「［短編集〝がま〟］あとがき」（三月）、「創作コンクールの感想ー小説を審査してー」（三月）、「創作コンクール選後の感想」（新日本文学七月号）、「文学サークルの経営について」（六月）、「勤労者の文学」（七月、国際タイムズ）、「［ひとりだち］あとがき」（七月二十一日）、「複雑な展望」（七月）、「勤労青年の性格」（八月）、「私の文学故郷」（八月二十日、文学サークル第一号）、「新しい鉄ぼう」（九月二十四日、文学サークル第二号）、「〝戦争未亡人〟と〝子供〟」（九月）、アカハタ）「〝文化日本〟の可能性」（十月）「すこしのんきにー小沢清君へ」（十月）、「葉山嘉樹の文章」（十一月、葉山嘉樹全集月報第三号）、「〝お山の大将〟はよくないー〝文学サークルをつくるためにー」（十二月二十四日）、「勤労者文学をもっと前におしだすこと」（十一月）、「身につく読書」、「文部大臣賞その他ー」（十二月）、「勤労者作家の三つの作品ー〝捕虜〟〝矢車草〟〝試工品〟ー」（十二月二十四日）

一九四八年（昭和二十三年）　四十九才

〈小説〉「〝たばこ〟の話」（一月）、「にがい唾」（六月、社会七月号）、「風のない日」（六月）、「一つの報告」（十一月）、「地蔵」（十二月）

〈評論・雑文〉「生活と文学のかみあいの弱さ」（一月）、「原子爆弾の夢」（一月九日）、「レアリズムをつくるもの」（一月十六日、勤労者文学三月号）、「平和の擁護とユネスコの憲章」（四月十二日、勤労者文学五月号）、「小さな感想」（一月二十三日）、「文学上の〝人間追求〟の問題」（三月一日）、「ある感想」（三月十五日）「文化を破壊するものと創るもの」（四月）、「〝民衆不信〟と〝革命性〟について」（四月、新日本文学七月号）、「作品批評を展開せよ」六日、（五月十一日）、「勤労者文学への攻撃に答ー平林、平野両氏の見解について」（五月十四日）「文学はすぐそばにある」（五月十七日）、「新しい〝公私〟の誕生」（十月）、「多喜二のレールは一直線だった」（十月、勤労者文学一九四九年一月号）、「枕木とレール［文サ協第三回大会における記念講演］」（十月十七日、文学サークル第十号）、「勤労者文学の前進［新日本文学会第四回大会報告］」（十月、新日本文学一九四九年一月号）、「〝後家さん〟と〝子供〟」（十二月十五日）、「志賀直哉に望むもの」（十二月）、「葉山嘉樹の記憶」（十二月三十一日）、「勤労者文学をもつと前におしだすこと」（新日本文学一九四九年二月号）、「生活と文学のかみあいの弱さ」（文学サークル第六号）

一九四九年（昭和二十四年）　五十才

〈小説〉「炎ゆらぐ」（一月）、「光をかかぐる人々」［続編、未完］」（世界文化一九四八年十一月号～一九四九年四月号）「背の高い娘」（三月）、「川岸工場から」（五月）、「ある日のスクラップ」（六月）、「ある婚約者たち」（六月、群像八月号）、「争議のある村風景」（七月、労働評議九月号）、「行水」

〈評論・雑文〉「茶ばなし二題」（一月）、「あたらしい小説勉強ー読者をつくり読者にまなぶ運動ー」（二月、勤労者文学六月号）、「こんなことが起っているー東芝大仁工場よりー」（五月、文芸）「読者を忘れた作家たち」（六月二十四日）、「伊丹君へ」（六月二十五日、文芸往来九月号）、「平和会議その他」（文芸時代七月号）、「二つのジャーナリスト」（世界八月号）、「本を読まされぬ人々」（人間八月号）、「〝太陽のない街〟のころー弾圧の近代化ー」（十月、世界春秋十二月号）、「文学と生活［全農林労組食糧関係労務者全国講習会席講演筆記］」

一九五〇年（昭和二十五年）　五十一才

〈小説〉「村にきた文工隊」（一月）、「静かなる山々」［第一部］」（アカハタ一九四九年十月一日～一九五〇年四月三十日）、「日本人サトウ」（五月）「町のこえ」（細胞新聞、新日本文学）

〈評論・雑文〉「思想性ということー金達寿〝矢の津峠〟ー」（四月二十六日、新日本文学会小説委員会報、No.1）、「〝質問します〟への回答」（新日本文学五月号）、「のろのろとぐつぐつと」（六月八日、新日本文学七、八月号）、「〝おみつと若者たち〟がふくんでいる問題」（六月十五日、新日本文学会小説委員会報第三号）、「ソロバンと人間」（七月四日）、「勤労者作家の作品とその態度についてー第五回小説委員会ー」（新日本文学会小説委員会報第四号）、「〝太陽のない街〟の歴史」（九月、現代日本小説大系月報26）、「われわれは数十歩前進しようー〝自転車泥棒〟と〝肴売の女〟とからあたらしく社会主義レアリズムについて考える」（十月、新日本文学十二月号）

一九五一年（昭和二十六年）　五十二才

〈小説〉「街道筋」（一月）

〈評論・雑文〉「〝生産面をえがく〟について」（一月三日、人民文学三月号）「会の方針についての共同提案［栗栖維とともに］」（一月十日、新日本文学四月号）、「駅前寸描」（二月九日、東芝労連の機関誌）、「私の人生論」（三月、［青木書店刊］）、「提案に対する諸氏の意見についての報告［栗栖維とともに］」（四月一日、新日本文学五月号）、「上海文化芸術工作者総会の行動綱領ヵ条をよんで」（人民文学五月号）、「結婚もしないうちにしなびてしもう」（五月）、「スケッチ〝町のこえ〟の批評について」（七月九日、民芸通信第八号）、「〝原動力〟と〝甦える大地〟について」（人民文学九、十月号併号）、「日本サトウのこと」（人民文学十一月号）、「同志佐藤の追悼会」（十二月五日、人民文学一九五二年二月号）

一九五二年（昭和二十七年）　五十三才

〈小説〉「平和の百二十八票」、「基地周辺」

〈評論・雑文〉「小林多喜二と宮本百合子」（人民文学、二、三月号）、「大衆は雑草ではないー〝日本人労働者〟によせて」（人民文学四月号）、「ヒルカス女史への手紙」（四月、人民文学七月号）、「中国の読本」（四月十二日、プレパレNo.4）、「［静かなる山々第一部］あとがき」（六月）、「人間をかくことについて」（八月）、「印刷文化の発展」（東京タイムズ九月二十二日号）、「浅草風景」（九月十一日、東京タイムズ九月二十六日号）、「ロシア革命に輝いた日本労働者の赤い星ー同志佐藤三千夫のこと」（九月二十五日）「いま広島へ出てきたー自分に即した回顧ー」（十月）「この人々を殺すな」［国民救済会刊の松川事件についてのパンフレット］、これから書きはじめる人々のために」（十

一月十七日）「年譜」（十二月、［角川版昭和文学全集所載］）

一九五三年（昭和二十八年）　五十四才

＜小説＞「富士と娘たち」（二月）「陽気なおじさん」（三月、解放六月号）、「サインをする話」（三月）、「かたむいた屋根の下で」（八月、人民文学十月号）「かえってきた人」、「ふみるけられる草」

＜評論・雑文＞「〝生産面をえがく〟について」（一月三日）、「黒島伝治〝渦巻ける烏の群〟」（図書新聞三月十一日号）、「日本国民の〝政治ぎらい〟」（二月九日）、「おかえりなさい皆さん！ー中国からの帰国同胞をむかえてー」（三月二十七日、人民文学五月号）「葉山嘉樹の位置ープロレタリア文学の開拓者」（五月）、「子供は抵抗できる」（六月）、「朝鮮民族のてがらをたたえよう」（アカハタ六月十八日号）、「新中国から吹いてくる風」（七月）、「内田巌さんについて」（八月五日）、「鈴木裁判長よあなたの任務は重い」（八月、人民文学十月号）、「松川事件と文学者」（十月）「沈め、沈め、大衆がもつ深さにまで沈めー生活と文学のあいだ」（十一月、文学の友一九五四年一月号）、「労働農民の作品が少いー多喜二記念日に際してー」（十二月）

一九五四年（昭和二十九年）　五十五才

十一月、ソ連作家同盟第二回大会に招かれて、岩上順一とともにモスクワに行き、帰途中国を訪問して翌年三月帰国する。

＜小説＞「静かなる山々第二部」（アカハタ三月一日～十二月十五日号）

＜評論・雑文＞「文学の統一戦線と労働者農民文学の不振について」（一月、理論別冊学習版Ⅴ集）、「ジャン・ラフフィットへ返信」（一月二十八日、文学の友三月号）、「金達寿〝玄海灘〟」（図書新聞二月六日号）、「金断寿〝金史良作品集〟」（六月）「あなたの心にきざす暗い影は何か？」（文芸七月号）「ビラ、ポスターなどの文章について」（八月、アカハタ）、「映画〝太陽のない街〟のこと」（新日本文学八月号）、「作品〝健〟についてー働く者の人間性をー」（学習の友九月号）、「映画〝太陽のない街〟は日本国民の誇り」（文学の友十月）、「〝太陽のない街〟のこと」（九月五日、わだつみのこえ九月十七日号）、「〝太陽のない街〟の映画化について」（九月十八日、文庫十月号）、「〝二銭銅貨〟について」（学習の友十月号）、「労働はいかに人間を鍛えるか［自作〝馬〟の解説］」九月、学習の友十一月号）、「生活描写の真実性［佐多稲子〝キャラメル工場から〟解説］」（十月、学習の友十二月号）、「すぐれた農民気質の典型［中野重治〝鉄の話〟の解説］」（十一月、学習の友一九五五年一月号）、「はたらく人へのあふるる愛情［宮本百合子〝三月の第四日曜〟の解説］」（十一月二十日、学習の友一九五五年三月号）、「そわそわしながらーソヴェト作家大会に招かれてー」（十二月二十一日、新日本文学一九五五年二月号）、「ソヴェト作家大会に出席して」（十二月二十八日、アカハタ一月十三日号）、「日本国民へのあいさつ」（十二月三十一日モスクワ放送、アカハタ一月八日）

一九五五年（昭和三十年）　五十六才

＜小説＞「五枚の皿」（小説公園三月号）、「〝旅行のナゲ〟」（十一月、日本評論一九五六年一月号）、「飛行機とシベリヤ娘」（十二月、全逓文化一九五六年一月号）「あかくなる顔」

＜評論・雑文＞「アジア五ヵ国の文学者懇談会」（一月）、「幸運なソ同盟の労働者ータバコ工場を見学してー」（二月十六日モスクワ放送、アカハタ三月十七日号）、「ソヴェト同盟を訪ねて」（新日本文学三月号）、「農民へのみごとな理解［橋本英吉〝自然と人生について〟の解説］」（三月二十七日、学習の友五月号）、「平凡なことがらの中に［壺井栄〝大根の葉〟の解説］」、（五月三日、学習の友六月号）、「中

国文学と日本文学ー二つの短編集を読んでの所感ー」五月十五日、図書新聞五月二十八日号)、「全ソ作家第二回大会に出席しての報告［法政大学での講演］」(六月二十五日、新日本文学九月号)、「ソヴェト紀行」［一九五七年、角川書店刊］」、「［静かなる山々第一部下巻］あとがき」(六月)、「［静かなる山々第二部］あとがき」(六月)、「職場や農村ですぐれた文学作品を」(八月十四日、新読書八月二十日号)、「中国と朝鮮の作品」(十一月二十七日、新日本文学一九五六年一月号)

一九五六年(昭和三十一年)　五十七才

△小説▽「北区の人」(一月二十日、新日本文学三月号)、「草いきれ」(群像)、「よごれた手拭」(小説公園十一月号)

△評論・雑文▽「短所だけをつつくな」(新日本文学五月号)、「〝めし〟について」(七月)、「破婚問題を扱う態度についてー壺井栄氏に答えながらー」(十月、群像)、「壺井栄氏へ」(十月二十七日、群像)、「みんな卅代になったばかり」(東京新聞［夕刊］十月七日号)

一九五七年(昭和三十二年)　五十八才

八月ごろから胃及び腸癌の自覚症状があらわれ、十二月、癌研究会付属病院で診断の結果、もはや治療の手段がないほどに病状の進行していることが判明する。

△小説▽「黒い輪」(群像四月号)、「金兵衛じいさんー思い出す人々(1)ー」(四月)、「北島善作さんー思い出す人々(2)ー」(六月十五日)、「喜ちゃんと勇ちゃんー思い出す人々(3)ー」(八月)、「一つの歴史［未完］」(新日本文学七～十二月号)

△評論・雑文▽「若々しい努力を期待します［「他人の中」劇化上演の際、パンフレットによせたことば］」(一月?)、「〝私も書きます〟について」(新潮三月号)、「労働者農民的作品が少いことの原因を示せ」(二月十日、「前衛」三月臨時増刊)、「勤労読者と勤労作家と」(二月二十七日)、「年譜［補足］」(五月、［筑摩版現代日本文学全集に所載］)、「悪い映画から眼を逸らすなー〝明治天皇と日露戦争をみて〟ー」(六月)、「短編を勉強しよう」(七月)、「原作者の感想」(八月?)［〝静かなる山々〟劇化十演の際、パンフレットによせたことば］)「宮本百合子批判の問題ーその自己批判と〝町のこえ〟について」(前衛九月臨時増刊)

一九五八年(昭和三十三年)　五十九才

二月十五日、東京世田谷の自宅で死去する。

△評論・雑文▽「退院にさいして」(一月六日、学習の友四月号、新読書四月号)、「絶筆［口述筆記による］」(一月二十三日)

△付　記▽

この年譜は、徳永直が生前保存してあった資料のみを、比較的短時日で整理したものであるため、多くの不備、脱漏があるはずですが、その点お許しをいただきたいと思い出います。たとえば、作品の執筆年月日、発表雑誌・新聞等について、よく知られている、あるいは図書館等で調べればすぐわかると思われるもので未調査のものも多く、また事項の部分では、一九三〇年前後、すなわち作品を発表するようになってから以後については、ほとんど作品だけを記載するにとどめています。(略)

一九五八年五月　　津田　孝

事務局だより

▼私は今、二十二年前のことを思い出している。久保田義夫氏の『徳永直論』が出版された年のことを。あの頃は、これから続々と徳永直論が出て、著作集や全集をも出るであろうとの幻想を抱いたことを。その頃を知る上で、高光義明氏の回顧録は貴重だが（『熊本民主文学』第二号に掲載）、ここには久保田氏の著書の「後記」より抜粋させてもらうことにする。

〝従来、徳永直氏に対する評価は直接間接にかかわりのある人たちによってなされて来たのであり、それはそれで貴重であるが、政治を含めいろいろな意味で氏のイメージが固定化した点がないではない。だから直接作品の中だけに氏の像を求めることも多少は意味があるのではなかろうか。それに氏の没後二十年、純学問的に氏の作品を研究しようという機運が抬頭しつつあることも確かで、今日そういう論文を見ることも多くなった。熊本大学の首藤基澄教授を中心に「徳永直研究会」が形成されたのもその現れであろう。〟

〝この本の第一章「思想するものと感情と」は、徳永直研究会の「徳永直研究」創刊号に、第九章「白いぶよぶよした奇怪なもの」は、「詩と真実」三二四号にすでに発表したものであるが、その後加筆訂正した。第二章「阿蘇・立野の居酒屋」も、「日本談義」（三〇一号）に発表したが、これは改変しなかった。

拙いものながら、わたしの評論が形をなすことができたのは、「徳永直研究会」のお陰である。会員の今村潤子（尚絅短大）金山誠（第二高校）木村一信（熊本女子大）首藤基澄（熊本大）高光義明（徳永直旧知）鶴田康己（中央女子高）中村青史（熊本大）藤坂信子（詩人）細川正義（九州女学院短大）三木サニア（信愛女学院）森塚利徳（菊池農高）和田勉（熊大大学院）の諸氏の御教示に対し、深く感謝の意を表する次第である。（以下略）

一九七七年三月一五日　　筆者〟

▼生誕百年特集号は、冊子形式にし背文字まで入れる計画であった。しかし原稿量が足りず普通の会報の分厚いものになった。でも寄せられた原稿は、それぞれがなかなかユニークなものばかりで、読んでいて楽しくなり、あるいは憤り、あるいは笑いがこみ上げてくる。年譜は、浦西和彦氏編のが一番新しく詳しいが、身内でもある津田孝氏編のものを転載させてもらった。血の通った暖かみのあるものだったからである。

なお、順序は執筆者のアイウエオ順とした。

▼動けば金がいる。今回の行事にも経費はどうするかの問題があった。心配は無用であった。実に多くの方々からの浄金が寄せられた。感謝のほかない。徳永直の火種はちゃんとあるのだと実感している。

▼行事をやるとき、後援のあることは心強い。今回も多くの御後援を得ることができ、大変うれしい。地域文化が確実に息づいているといった感じである。熊本の文化は生きている。御後援下さった皆様と、真の文化は地方から発信されるということをかみしめたい。

▼18ページに広告したように、熊本・徳永直の会の事務局が移る。中村研究室での最後の仕事が終わった。熊本大学に感謝する。教育学部さらに国語科に感謝する。地域文化のために協力して下さってありがとう。

徳永直生誕百年祭御案内

1999年2月13日（土）

1．碑前祭　10：00 ～ 10：30

○場所　立田山登山口　徳永直文学碑前（泰勝寺入口）

1．記念行事　13：00 ～ 17：30　入場無料

○会場　熊本市国際交流会館大ホール

(1) 講演　「徳永直は熊本である」　熊本大学教授　中村青史

(2) 講演　「徳永直と映画」　映画評論家　藤川治水

(3) 映画上映　「太陽のない街」　監督　山本薩夫

1．徳永直を偲ぶ会　18：00 ～ 20：00

○会場　国際交流会館内　みゆき

○会費　5，000円

主　催　熊本・徳永直の会

後　援　熊日・RKK・TKU・KKT・KAB・エフエム中九州
NHK熊本放送局・熊本市教育委員会・熊本県観光連盟

※　寄附　大歓迎（郵便振替 01940－2－11498番　熊本・徳永直の会）

連絡所　熊本市黒髪2－40－1　熊本大学教育学部 中村研究室
TEL(096)342－2584　FAX(096)342－2529

発行所　熊本市北千反畑5－13　画廊喫茶　南風堂
TEL(096)343－9664　FAX(096)344－3135
頒価 500円

印刷所　㈱昭和印刷（〇九六）三四四－五二五二